

## 自己評価報告書

平成23年3月29日現在

機関番号： 21601  
研究種目： 基盤研究（C）  
研究期間： 2008年度～2011年度  
課題番号： 20590515  
研究課題名（和文） 循環器疾患の登録を実施している地域住民の生活習慣と認知機能低下に関する追跡研究  
研究課題名（英文） Relationship between lifestyles and healthy cognitive impairment from the cardiovascular disease registry study  
研究代表者 早川 岳人  
（福島県立医科大学・医学部・准教授）  
研究者番号： 50362918

研究分野： 医歯薬学  
科研費の分科・細目： 境界医学・医療社会学  
キーワード： 介護・福祉

## 1. 研究計画の概要

地域に暮らしている高齢者の生活習慣と認知機能の関連を明らかにし、認知低下予防の公衆衛生的な対策を明らかにする。循環器疾患の登録を実施している地域の調査対象者を追跡し、生活習慣が将来の介護状況や死亡にどのように関連するか明らかにしていく。

## 2. 研究の進捗状況

滋賀県K市の協力を得て、市下の65歳以上の地域住民を年齢階級別に層化して無作為に抽出し、調査に同意を得られた391名を対象とした。認知機能低下を測定するスケールとして、MMSEを使用した。認知機能低下者の割合は85歳未満で男女とも5%であったが、85歳以上では男性28%に対し女性は38%であった。これは男女の平均寿命の違いによるものだと考えられるが、一方で女性のほうが顕著であったことから、女性に対するケアの問題が浮き彫りになった。学歴は中学校までの群が、高校以上の学歴を持っている群より認知機能低下者の割合が高かった。この結果は、近藤らが実施した研究においても同様の結果が得られていることから、妥当性があると考えられる。また、特に喫煙習慣や多量飲酒がある者ほど認知機能低下者の割合が高くなる傾向がみられた。これは、喫煙習慣や多量飲酒は脳卒中などの循環器疾患の危険因子であることから、予後として裏付けられる結果であった。一方、多くの趣

味を持つほど、また運動習慣がある者ほど認知機能低下を遅らせている傾向がみられた。これまでの分析により、高齢者の認知機能低下には、日頃の生活習慣が関連していることを明らかになった。

このフィールドで実施している循環器疾患の登録を行っていることから、脳卒中発症によって介護が必要となる割合が高かった。日頃の生活習慣が脳卒中などの循環器疾患と関連をしており、その後、認知機能を低下させることで介護が必要となると考えられる。

次年度においても、要介護に至る情報と照合することにより、生活習慣がその後の介護度に影響を与え、また死亡に影響を与えるかというライフサイクルに合った系統的な研究を行っていく予定である。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

対象者における死亡状況の照合をフィールド先の医療情報を使用して照合を行っていくことが必要である。

## 4. 今後の研究の推進方策

生活習慣が将来の死亡状況にどのように関連するかについて、照合が今後必要であるとともに、死因との関連を明らかにしていくのが今後の課題である。引き続き、介護状況との関連をみていく。

## 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Dodge HH, Kita Y, Takechi H, Hayakawa T, Ganguli M, Ueshima H. Healthy Cognitive Aging and Leisure Activities among the Oldest Old in Japan: Takashima Study, *Journal of Gerontology: Medical Sciences* (special issue on healthy aging), 2008; 63:1193-1200. 査読有.

〔学会発表〕(計1件)

早川岳人, 喜多義邦, 武地一, Dodge HH, 上島弘嗣. 地域住民を対象にした生活習慣と認知機能低下との関連, 第21回日本老年医学会東北地方会, 10; 2010年10月30日; 福島市.